

光のやま
外號

大谷上人

目次

大谷仙界上人略歴……………	(一)
落光……………	ミオヤの光社……………(二)
仙界上人入涅槃記……………	弘道……………(三四)
大谷上人を追憶して……………	中川弘道……………(三五)
大谷上人と私……………	佐々木爲興……………(三六)
大谷上人の御靈前に……………	蔡道……………(三七)
大谷上人の思ひ出……………	山崎辨誠……………(三八)
感激の三涙……………	立川圓月……………(三九)
故諱道上人と仙界上人……………	井上隆森……………(四〇)
大谷上人……………	堺静道……………(四一)



大谷仙界上人略歴

上人は明治十七年六月三十日筑前直方市外新入長安寺大谷仙海師の長男として出生十二歳の時には慈母を、十三歳の時には嚴父を亡ひ、博多正定寺孤田師に就き、鎮西支校(第八教校)を経て東京に於て修學、明治三十六年五月長安寺に住職、大正二年より辨榮聖者に師事し自行精勵化他懇勸、大正十二年一旦住職を辭任し、次で小倉心光寺に入り、大正十五年又長安寺に轉じ、此間全國特に九州光明會に盡瘁、作佛度生の願行圓熟、昭和六年一月十四日遷化せらる。行年四十八。

一 蓮社心譽不亂念阿尊聖仙界上人

澤光る

ミオヤの光社
編輯係

二

○火薬を含んだ眞綿——此師にして此資あり

大谷上人が小學を出て後遊學した鎮西支校には、徳望一世に高かつた名校長の東慈海師ありて、父の如き慈愛と準の如き炯眼を以て、九州男子の心意氣を、そのまゝ嚴護法城の熱と志とに燃え上らして居つた。柔和にして謹直な中に、どこか火薬を含んだ眞綿と云つたやうな氣性の青年大谷師が人生の門出に此の名校長に點火されたことは實に有り難い境遇の縁であつた。高德な凡人、老いたる童、圓満玉の如き上人の晩年にも猶一片耿々の志氣主義貫徹の熱血に燃えて居つたのは蓋鎮西支校の形見である。

○芽生へし力は地下の潤ひ——父亡き後の世話

父亡きあとは姉婿の醫師宮川久米次郎氏萬事を世話し師をして今日の大器たらしめたり。陰に陽に師を扶けて光明會發展の裏にありて隠れたる甚大の奉仕をしたるは宮川氏なり。斯かる間柄の宮川氏が醫師なりし關係もあり、且つは佛門將來の動きに見る所ありし師は、東京の宗門學府に遊學の際は當時椎尾笹本諸龍象の巢なりし興學舎に移りて暫くではあつたが醫學を修めたこともあつた。

○第一流の雄辯家雄辯が出来なくなる——父子二代教界の雄

嚴父大谷仙海上人も鎮西一流の布道家なり。東京を去つて父の跡を繼ぎし師は、布教壇上に巢立ちして練達其功を遂げ、後に九州第一の布道家となつた。しかるに其華やか雄辯も聖者の門下に修行を積むに隨ひ却つて其の彩りを失ひ、或年早岐大念寺に布教したる時の如き、異彩ある某々上人等の布教に馴れし檀家の者より「今度のやうな説教師なら……」と抗議を受けし住職は「出来ないのぢやない、しないのです、いや修行が積んで出来なくなつたのです」と辨解に苦んだ。でも囊中の錘、晩年圓熟したる布教は其徳化に吸ひ付けらるゝ、既信未信の人達の心根に徹せずには止まなかつた。

三

○あこがれる淨土の再會——疾く亡りし父母

十二歳にして慈母翌年は嚴父を亡ひし師が、最後再びたゞぬ病の床に用ひし物迄も、わざ／＼ありし昔をしのぶよすがと、兩親の用ひしものを用ひたる思慕追孝のまごころに、見舞ひの人の涙をそゝりしことであつたが、世の荒波にさするふ孤兒の一生も、上人の如き一生と輝いてこそ、父子二代つゞいて教界の雄となり報佛恩の一路を往きし淨土の再會やいかに嬉しきものなりしならん。

かくて家の關係上割合に早く結婚し二女を擧げたり。布教に専らならんため寺を退きたる等のことありて、家産豊かならざるを知れる友人、後年、奥さんの餘りにやせたるを見て戯れに「大谷君、君は、奥さんにや、飯や食はせ居るか」と聞けば、答へて、「時々や食はせ居る」。

○おつとめ式の新文案

師がまだ二十幾歳、長安寺に住職して後まもない頃であつた。從來の淨土宗のおつとめ式は純信の表白にならぬと云ふので、別項の如き自家獨特の文案を草し、別に訓よみの平假名を添へて印刷した。そこで當時の司教殿から宗門の法制上大目玉を受けると、師は「一宗から追ひ出されても仕方がない。自分の檀家だけでは用ひます。他にはおすゝめしません」。

◎香 燭 文

願以此身爲香燭 內常不斷信心火
念々焚燭稱名香 奉事西方彌陀佛

◎三 皈 禮

一心敬禮極樂世界 本願成就身阿彌陀佛
一心敬禮極樂世界 光明攝取身阿形陀佛
一心敬禮極樂世界 來迎引接身阿彌陀佛

◎懺 悔 文

彌陀慈光照十方 招喚悲聲歷十劫
我由無始貪瞋痴 業障黑雲覆心眼

五

四

官冥不覺遊佛恩 今正懺悔奉歸命

◎歸命證讚文（日中證讚一略す）

◎安心領解文（あき小消息）（よる一枚起請文）一略す）

◎念 佛（光明攝取文一略す）

◎稱名相續

願普傳大悲 共一切衆生 乘佛本願力 往生安樂園 十念

◎三 唱 證（南無阿彌陀佛三唱一證三返一略す）

◎發 願 文

願致彼因得六神通 入十方界度苦衆生

願我慈悲無際無限 長時長劫報佛慈恩

○御布施に嫁さんを貰ふ

師の親しき某氏の家庭不和を生じ、細君里に歸つて久しく歸らず。關係者は再三手を盡したるも効なし。或時師は突然其の細君の居る里方を訪づれ、つか／＼佛間に入つて念佛、一時間たつても中々止むる様子もなし。家族は忙しい最中に大迷惑してゐると、漸く念佛がすんで家族に向ひ、「久しぶりゆつくり回向しました。さて御寺の和尚が回向に來たら御布施を出すのですが」と、あつかましい催促。に戻つた細君の父母あつげに取られてゐると、「いや今日の御布施には出戻りの奥さんを貰つて行きませう」と否應なしに連れて行く。細君も父母も狐につまされたやう、怒も怒も、どこへやら、行く人送る人結ばれた心はとけて、唯だハイ／＼。父親も「大方こんなことだらうと思つてましたやな」と陽氣な笑ひに和氣一時に藹々。

○無類の珍引導

まだ若い時、檀家の一人眞宗信者となり隣り寺の眞正寺にのみ參詣してゐた人が亡くなつて、葬儀の案内により師は其家に臨めば、既に眞宗僧が來りて讀經してゐる。拜む位牌に書いてあるのは本願寺から貰つた法名。さて愈葬式が嚴かに行はれて、いざ引導となるや、大眞面目の師は、やをら棺前に進み、振る手の拂子はあらぬ方角に動いて、

「汝引導は既に眞正寺（眞宗の寺）にて受けにけり。用なき死骸は裏の山に往け……」。

六

と大音聲、十念授與も一きは嚴かなり。

引導一つで未來が助ると思ふ遺族は此のフザけた引導に業を煮やし、式後和尚に大抗議を捻ぢ込む。すると師は落ちつきばらつて、引導のゆはれを説き聞かし、「本人は生きたうちに眞宗の信心で魂が引導されてゐるのだから、死骸は抜け殻、裏の墓場に往くだけである。亡き本人は吾が意を得たものとして今日の引導を最も喜ぶだらう」と。遺族たゞ啞然、ナアル程。

○葬式は出來ぬでも出來るものが出來た

一生貧乏で通つた師は二十年計りも前のこと、師走も廿八九日と迫つても、不景氣、晦日、借金、正月、餅、そして囊中無一文、瘦せても枯れても一軒の寺の年越しに策が無い。一日降りしきる雪の中を野越へ山越への金策巡禮の大晦日、折も折その留守中に突然御葬式の申込み。年末のことゝて式は急ぐ、和尚は行く術不明、檀家の人々は門前に寄せて來る。ワイ／＼騒いでゐる中をやつと歸つて來た若い和尚は言ひ譯一ツ言はず平氣な面持で、「和尚が留守で葬式は出來ぬでも、私や出來るものが出來たぞ安心した。さ、之からゆつくり引導渡しませう」。

○酒器の葬式

若い時分よく飲み、よく失敗したその頃のこと、再三の禁酒も統ひ勝ちの古るごろもに、おのがわが身に愛想をつかしたか、契り深き銚子盃等と水さかづきをなし、自坊本堂前の大松の根元にそれ等酒器一切を埋葬して、而もわざ／＼袈裟ころもの姿も眞面目に、拂子打振つて嚴かに引導を渡すらく、

「げに汝は我心を亂す提婆なり。父祖三代の怨敵なり。之を遠離すること正に百由旬たるべし。今汝を送る。汝永く松の下に安眠して夢々我が目前に浮び出ることなかれ」

○酒代打敷

自誓自誠、かくて宗祖七百年御忌記念の禁酒を決行した師は、その後飲酒の習慣盛

八

なる地元の葬式法事に行けば、酒を手にせず、別に酒代を請求した。酒代の請求には笑ふにも笑はれず應じてゐた檀家の人々、後に至り寺の佛前にみごとな大打敷が新調されているので、何方の寄進ですかと聞けば、「皆様から法事葬式の時頂いた酒代があんな立派な打敷になりました。檀家の人々を酒代打敷と呼んで、師の酒代請求の結昌をどんなにか喜んだ。」

○紫の改良服

宗祖七百年の御遠忌を郡内寺院總出勤で、師の住職寺で厳かに執行。其の頃改良服（黒で羽織やうのもの）主義の師は此の盛典の導師を勤むる爲に、わざ／＼紫鹽瀬の改良服を仕立て、金襴の大しえに博多織の縞袴と云ふ珍ないでたち。大衆一同目を白黒中には批難攻撃頗る鋭いものもある。その中を師は平然として、五晝夜にわたる導師役を改良服主義をまげずに、而し式に相當した色地で、たう／＼貰いた。

○見舞を云はぬ病氣見舞

十餘年も年上の梁井顯應師病んで大學病院に入院。師見舞に行き終日枕邊で信仰の話の外は病氣の見舞を一言も云はず。歸りし後病人喜んで曰く、「今日だけは病氣を忘れてせい／＼した。」

○一人二代の住職

長安寺を住職して居ても布教にばかり出て、一向住する職でないのて、檀中から苦狀百出。師は不在勝では住職の任がとまらぬとはもつともだとして、苦狀云はるゝまゝに「さうですか」と寺を去つて、家族を在家に住ませ、身をさ／＼けて布教に専らになつた。その時寺のあとには嬢さんに婿でもしてをいたら家族も寺に住めてよからうとすゝめる友もあつたが、恬淡たる師は責任を引いて聞入れず全くの他人を後任住職にした。後年その人が亡くなりて、又請るゝまゝに「さうですか」と元の長安寺の住職となつた。

○割れ目のつなぎ

明治四十四年御遠忌の際筑前團體何千人か本山に詣で、歸路は大坂から一艘借り切りの汽船の中、團員中ゴタ／＼ありて幹部に對する不平勃發だうしても解決つかぬ。中に在つた師は、ゴタ／＼の中に割り込んで行つて海上慰問演説、「今周防灘の荒るゝ波もやがて平和の港につく如く」云々と信仰談をはじめれば、その諷刺に富む純信に聞きほれて、敵も味方も一緒に拍手、不平の聲はいつしか消えて一同ニコ／＼總和解。

○「だうにもならぬ時になればだうにかなる」

大正二年、九州光明會の草分け波多野諦道上人より、九州勸化の辨榮聖者に隨行して諸國行脚するやう、すゝめられた師は、「寺を出た後の寺務を見てくれる人が無いがだうしたら」と、波多野師に相談すると、波多野師は、「そのあてはないが、一切衆生のためだ、だうにもならぬ時になれば、だうにかなる、兎も角隨行したら」との事だ師は即坐で決心。家族茫然として置き去られ再會するまで一年餘。併し此の決心の一石が現在光明會の碁盤の全面を支配してゐる。

○「すゝめて聽かねば刺し殺せ」

同じきもののみ同じきものを知る。大聲里耳に入らず大聖いまだ市に隠るゝ時、九州聖人と謠はれし波多野上人ありて、はじめて上に辨辨聖者を見出し、下に大谷上人を見出して之を結んだ。師も亦一度白羽の矢を立てゝ光明道をすゝむる事になつたら、手をかへ品をかへ親切に濫かに人の心に溶け込んで行く。無理にはすゝめず何年たつても勸化の手を退かぬ。東京の某學徒を幾年の勸説功を奏して聖者に入門せしことを見届けし時の如きは、「聽かねば刺し互へて死する覺悟で勸めよ。」と云ふ波多野上人よりのきつい手紙を其の彼に見せて喜ぶのであつた。

○知らぬ家に上りこむ

親しき東京の友人の家に訪ねた師は玄關の案内も請はず上り込んで、長火鉢の側に坐り、ゆつくり一服してゐるところへ歸つて來たのは見知らぬ奥さん、見た事もない

人が主人も居ない留守の居間に上り込んでゐる。出家の様子なれば盗人ではない筈。げげんの顔は兩方とも。——實は隣りの知らぬ人の家に一軒違ひで上り込んだのであつた。わざ／＼隣りから送つて來たその未知の奥さんも之が開法の縁となつた。

○九州の光りの父

九州には丹羽橋爪の諸先輩、永瀬矢野の諸導師、權藤梁井の諸法將、それに中川兄弟の兩重鎮を始めとし他に至誠熱心なる能化者多く、加ふるに松本橋本、横尾篠原、伊藤富田、元崎鳥羽瀬その他各地に一騎當千の居士大姉甚多く、何れも至誠の信徒たるのみならず見識あり能力有る人達。之が全九州一團となりて、能化所化、親密なる一家の如き他地方に見られざる有機體をなせり。之を斯くまでに仕上げ、一大僧伽の同胞各々報恩の誠に和合して働く中心たる上人の、徳望と感化と犠牲と親切とは實に大なるものであつた。能化も所化も、先輩も後輩も、光明會の人も以外の人も、上人にだけは中心歸服して居つた。九州光明會の信者教家にして上人の感化を喜び上人を親の如く慕はざるものは恐らく一人も無かるべし。

○光明法陣烽火の火元

佐々木上人本山巡教師として大谷上人の寺に留錫、寺内の様子他と異なる。聞けば辨榮聖者の感化とのこと。茲に於て上人勸化の縁により佐々木上人聖者の門に入る。それが糸口となりて、順次、熊野上人藤本上人の結縁となつた。特に學者で無口、聖者御人滅までは布教に立つたことのない藤本上人を教壇に出盧せしめたのは、大谷上人が主役格で九州光明會發會式を行ひ、藤本上人を特に請待したのが切り口の縁となるのであつた。其他の要人亦此例にもれず。

○光明會のレール工夫

今の全國光明會には、會長は如來様、會則は南無阿彌陀佛があるだけで、その他には會長も會則も會員名簿も會費も會機冊紙も何も無い。去るにまかせ來るに任せ絡繹とつゞく道づれの親しい融合、何等の統一組織無き中に、美しく麗しく一糸亂れぬ歩

調の整ひ行く所にさすがと思はせる節がある。併し聖者の御入滅に逢ひ奉りて天日一時に開きの思ひに沈んだ時の前後には色々な難關もあつた。積極進出論者と並んで消極退嬰主張者あり。甲師は甲の法を中心に聖者より授かり、乙師は乙の法を中心に傳へて、運動の統制にも法門の統一にも、眞俗二道とも歩調の揃ひに聊かあふなつかしい所も見えた。かゝる間を大谷上人は、其圓融無碍の風格と、無我奉公の赤誠を以て、時處人の配置甚だ宜しきを得たる畫策を胸に秘めて、先輩後輩の中軸となり、光明車輪の運轉を滑かにした。而もそれは地下水の如く表に現れず、下積みとなつて至誠に仕へ、多士濟々たる同門道俗の心の根より根を傳はつて、同じ香に咲き出づる華をつちかつた。今日の盛觀をもたらした光明會の軌道敷設には、聖者常隨の古參者として萬人に融け合ひ萬人に親まれし大谷上人の、苦心の汗が光つてゐることを、知らぬ人の多いのが却つて上人の喜びであらう。

○光明ポンプの迎へ水

ポンプの迎へ水が、出水がつくとその水にまぎれこむ如く、上人は光明ポンプの迎へ水となつて、それ／＼の人がそれ／＼の動きを示せば、蔭に廻つて如來様の輻重輪卒を忠實につとめた。聖者の御遺稿も上人の苦心の蒐集によつて散失を免れた。鳥栖光明會館は上人を初代主任として威容愈々整うて來た。九州一圓上人の大傘下に萬代ゆるがぬ光明陣の羽翼が張られた。更に芽生ゆる若人の張りちぎれる如き力のうなりにも洋々たる前途に威神の輝きを約束してゐる。御滅後十一年の「時」の威神にすぐられて、蹉跌すべき事業は蹉跌し終り、好ましからざる計畫は皆悉く流産し、枯れ葉や黒穂は振り落されて、残るは何れも至誠一徹の輩、全國要人の動きに同入和合の煙波漂渺。さはさりながら靜觀すれば、爲すべき事のまだ餘りに多く、爲すべき力の未だ餘りに足らざる會の現状を前に、報恩の雄志を抱いて病床に呻吟せる上人が「六八と願ひし事を三つ年にかなへてたべよ大ミオヤ様、五十歳は十三回忌立つべき時」と、自覺々他の赤心を至誠の祈願にもらしたる心中や果していかなりしならん。

○明日は昨日に非ず——洋服陣羽織の試案

時勢は動く。大衆は跳ねる。世界は縮る。闇を奪ふ光、光を奪ふ闇紛々たり擾々たり。日本の明日は決して昨日の日本ではない。此のあはたゞしき世界の進運に取り残されて舊に依りて舊の如きのみが時代を導く教團の能ではない。山の宗教を野に、野の宗教を街に、街の宗教を更に心に、進路に先手を打つ人は、時に笑はれるが笑つた人は多く「過去」と心中してしまふ。新しい道が迫害を受けぬのは盛んになつてゐない何よりの證據。動く社會の第一線から退いたものや未だ立たぬものの有閑有産の人々が、公卿式長袖の法衣を圍んで法悦にしたる一面も差支ないが、生活聖戦に血みどれになつてゐる同胞の爲にもそれにふさはしい僧俗共通の一新路があつていゝ筈。新日本の工業を導く北九州に教團を率ゐる上人は考へた。「第一義諦」を含む「世界悉檀」と此「爲人悉檀」にふさはしい外形と統制とを。上人が病中光明陣の新組織や制服までも試案され、且つ檀越宮川篠崎横尾兄弟を大音聲に激勵したる上人の法雷こそ明日は昨日でない光明法陣を思ふ止むに止まれぬ切々の赤心を杜鵑血を吐く聲に托したのであつた。「虚無の身無極の體」の雄姿颯爽として陣頭に立つ「靈應」の上人を乗する駿馬や誰ぞ念力堅固の九州健男兒。

「初一念貫き通す一途が親の命せを立つる操か」

○五劫窟の思惟

唯見佛三昧のみに集約して萬機普益の利を失ひ、全く三昧成就を期せずして開發更生の道を失ふ。此兩極端を離れて、三昧更生と萬機普益の二邊を含む不但中道の法門こそ、上人の自らも切りに思をひそめ、人とも語り合つた所であつた。麓は廣く一切の機根を載せ、頂高く修行は雲表に聳ゆる富士山は、正に光明主義の象徴であらねばならぬ。長安寺の裏山に建てし念佛堂を「五劫窟」と名けて至心念佛し、上根も下根も定機も散機も現實に救はるゝ中道の更に新しき靈示を祈願して止まざりし上人の、普門慈濟の涙と方便爲究竟の苦心は、全く法藏菩薩五劫思惟の姿であつた。

「果の彌陀は彼土に在りて法藏は因位の我と共に御修行」

法藏因位を念佛衆生の上にも見たる上人の見識はたゞの見識では決してなかつた。

○顯現極樂

上人一代勸化の歸結は「顯現極樂」の體訓であつた。法藏の願成に溯り衆生念佛の肝要を説き示されし此四字こそは、上人三業説法の體教であつた。上人の在る所、上人の動く跡に、上人の身を以て説きたる顯現極樂は事實となつた。そのみでない、「とけぬれば敵も味方もなかりけり一味同體春風の裡」。

誠に上人には天下一人の敵も無かつた。否いかなる種類の敵があるとしても敵で無くなつた。世のため人の爲めきり／＼舞ふた上人の一生は、正しく世を極樂と顯現する楽しい舞に相違なかつた。

「任のため忍びこらへて極樂と世を體現して歸る本國」

○體現本位

喚起位には喚起位の體現、開發位には開發位の體現、體現位には體現位の體現。體現こそ念佛の歸趣、光明主義の中心、三昧は之を成就する徑路手段なりとした上人の慈訓は實に時事に割切なるものであつた。中には佛法の網格に通せざる暗禪の在家衆云々の靈感と呼び云々の境地と稱して誇示するも、何等生活體現の相應するもの無き所より、識者の嗤笑を買ひし不健全なる變態心理で佛法を誤る誇示も亦東都西畿北邊南鄙に現れて、聖者御滅後の法色を濁さんとする一味の傾向もあるを看取したる上人は、常に顯現極樂の生活目標を大旗に建て、玉石混淆の時弊を匡正する所が多かつた。

○第十八願と第十九願

一家の所見を纏める前には、同一問題を各先輩に究尋し、一方未刊御遺文の中に劃切なる指南ありやを探らしめ、頗る懇切を極めたり。例せば第十八願と第十九願とを生因と生活、念佛一行と體現萬行と見る點の如き古釋以上に深義を探つて止まざりき。世には一方に宗乘傳統あり、一方に共生主張あり。その何れにも無障礙なる光明

主義の統合核心を把持して居つた如き、亦圓滿具徳の一表示である。晩年千葉縣の善光寺にて「泥洹の道に次ぐり」の質問を受けてまで、宗書古來の釋義に満足せず、思惟を重ねて顯現極樂の深理に導きし如き、亦法門無盡誓願學の不退精進の一生であつた。

○「清さんがそんなに偉い人だつたかなあ」

「幾度か生れ更りて報いなん四方諸人の淨き供養を」

病革るや東西遠近より見舞品や見舞ひの客踵をつぐ。寺に行く爲めに下車する軌道の小驛は時ならぬ忙しさ。附近の古老「清さん（上人の中年迄の幼名）がそんなに偉い人だつたかなあ」と不審がるのも無理はない。

上人は家に在つてはたゞ好いお父さん。村に在つては唯好い和尚さん。子供に逢つては唯好いおちさん、罪の人には唯好い味方、信者に取つてはたゞ好い導師。萬人に隔てなき萬人に同一態度の唯親しみの人、何人にも一步は高く二歩とは高くない同列の案内者、水鳥の水に居て水に濡れざる氣高さを名利の塵外に超然として、清水の如くすき通つた柔和な親切が、萬人の魂に溶け込んだ平凡な高德光る凡人であつた。

○開腹中に談笑

胃袋を三分の一程切り取る手術中に平氣で談笑した治療で一時健康回復したが、宿痾再發、六年一月十四日竟に遷化された。

○茶毘の煙

人里を離れし庵に、すゝり泣く枯葉のゆらぎ、みぞれ降る夕べ悲しく、上人のむくろは消えぬ。眠りにはあらで目ざめし、とはに照る旅とは知るも、殘されし迷ひの子には、涙凍るさびしき別れ母のごとやさしきみ聲、いつかまた聞くよしもなし、懐かしのひとみには又、逢へざるかせめては夢に。日は入りぬ筑紫の枯野、たゞ涙又たゞ涙、南無あみだ聲もしぐるゝ、みあかしの光もおぼろ風むせぶ煙のゆくゑ、たれこめし闇はふかくも、おゝ照るよきよきみくにに、慕はしき〜上人。

仙界上人入涅槃記

道友 弘 道

昭和五年五月、年來の宿痾再發、治療藥餌に盡せる甲斐なく、病勢日々に重り、同十月病床の人となりければ、徐に臨終の用意にかゝり、寺務百般の整理に努め、近く恩師聖人の十周年の聖忌日をも迎ふることとして、多年恩師より指導啓發を受けたる信仰の眞髓念佛三昧に得たる内感自證等、十數項五十ページに亘り其蘊奥を傾け、遺稿として執筆。

臨終時及滅後、後人家族の心得として詳細を盡せる記録を遺し、遺骸を納むべき棺並に位牌に至る迄自ら雄筆を揮つて他手を煩はさず。棺蓋に遺された絶筆の跡。

(表) 南無阿彌陀佛

死して行く用意の棺と思ふなよ
生れし時の産湯だらうよ

(裏) 無量壽

臨終と吾れは思はじ大ミオヤの
産みの悩みをたゞ感謝して

とあり、周到なる入涅槃の用意至り盡せる事古來の先徳のそれにも増て尊き限りにこそ。十二月に入り四日、恩師聖人の十周年の聖忌は病床に念佛して嚴かに之を迎へ、其前後交々病床を見舞ふ來客に對し、一々其機に應じての說法、壯健時のそれにも増たる熱と力には驚かざるを得ず、多き時には一日の說法實に七回に及び毎回一時間半の長きに渡り撓む事なく、而も音吐明々として四隣を壓し流動物のみ攝取せる大患とも思はれず、最後の遺法を聽かなむと日々群參する道俗、夫れに對する大悲の遺教、釋尊入滅の涅槃像を拜するの觀あり。

其月の十一日、村の小學校長は職員十餘名と共に、翌日には村の主婦會長及び幹部十數名來訪、それに對し末期に近き身とも思はれざる元氣にて、心弱くも涙にくるゝ人々を勵まし、哀々たる慈音は諄々として盡る時なく、重患の日を說法に過さるゝ事

の尊さよ。某道友の來訪に對し、最後の教誡として書き與へられたる、短章

南無阿彌陀佛 勇往邁進

愛嬌よいのはよけれ共 二刀振はずたゞ一刀

眞劍勝負と身を捨て、 打ち込め飛び込め後見すな

又某法弟に對して

覺 進

色氣名譽は打ち捨て、 光明軍の第一線

弘誓の鎧に身をかため 法劍執つて法鼓打ち

法幢建てゝいざ進め 世界最初の名に恥な

時は來にけり光明の 世界は聖旨の顯はれよ

顯現菩薩の精進は 吾等が光榮と

勇み勇んで鬨の聲 南無阿彌陀佛と呼び叫び

魂をこめては身を拵げ 打ち出す法丸砲身の

くだくる迄と覺悟して どころ迄も進めかし

昭和五年十二月三十一日 仙 界

親族の某女に

南無(なん)と△だからよぢやないか

○阿彌陀はとけは胸ひろくと お慈悲あたゝか眞丸な

最も奇抜なるは、光明軍の第一線に立つ可き、將卒の服用すべき陣羽織として、横臥のまゝ家人を指揮して縫上げさせ、自ら筆を執つて朱墨の色鮮かに、文字を配置し姉婿宮川醫師の來訪の際、右の陣羽織を着せ、進軍する模様を眺め笑をたゞへて安心の態、軍資を擲つて光明軍の活動を援けん事を依頼さる。

臨終の時至る迄、聖意弘宣、利物偏増に努めらるゝ尊慮、誰か感奮せず居られよふ。

越えて十二月二十六日、第一回大手術後三周年の記念日、朝來家人に命じて沐浴洗垢、剃髮除鬚、交々來訪の見舞客や道友に對し、説き去り説き來りて法談絶へず。

午後四時、十夜法要にて參詣せる檀信徒に對する告別に兼ね、長く奉仕せる當寺の本尊前に最後の禮拜を遂ぐ可く、骨と皮のみなる骸骨其ものゝ身を本堂に運ばせ、横臥の儘先づ本尊前にいとも名殘惜げに町重に恭敬禮拜、朗々たる音聲、南——無——の引聲念佛、鬼神をも泣かしむ、三拜終つて外陣に向をかへ、涙にむせぶ數百の信徒に對し、靜かに力ある聲にて

『之の寺に産ぶ聲上げて四十七年、皆さん方に一方ならぬお世話になりました、其交情に酬ゆる説法も肉身の口を通しては之が最後となりました』云云と

餘命の旬日に迫れる重患の身とも思はれぬ説法には満堂の信男信女、誰れか頭をもたげ得よう、すゝり泣く聲、感激の涙、之の尊容、神殿の光景を如實に寫し得る筆者有り得やう。

臨終行儀

之を最後の説法として翌廿七日より正しく臨終行儀にかゝり、病室は必ちにして臨終室に改めらる。

室の中央に、枕を北に右脇の外横臥出來ざる病態を幸に面西して、向ふ西側の正面には恩師の聖筆になる三身一如の聖像を前に香華燈燭、供物いと懇ろに、其横なる額面は肉身の父を亡くせし後の育ての親たる立石老師夫妻の寫眞、次に現内室榮明尼の兩親の影、枕邊なる北側に掲げられたる額面二つ、一は恩師聖人の筆なる靈山會上釋尊傳法相承の墨畫、他は恩師辨榮聖者の眞影、東面には生みの親たる先代仙海上人の寫眞、其兩側に無對光、無量光と表記されたる弓張提灯一對を掲げ、南側には正面に三尊の迎接恩師筆の掛軸其左横には同じ恩師の靈筆なる『執持名號一心不亂』の大字掛軸、側らに侍せる道友弘道に向ひ、一々額軸に説明を加へ『かくも親様に圍繞せ

られて長夜の眠りを覺させて頂く事の嬉しさよ」と法悦境を物語られ、三尊迎接軸の横出入口の扉には自ら執筆して。

仙界臨終行儀を即、榮明尼の別時念佛三昧會とす、

會中作業を看病及寺庭用の幾分の加勢とす、但し左記念佛時間となれば一切を放擲して一心不亂に修行すべし、

一、午前三時より四時迄 (第一回念佛) 一、午前六時より七時迄 (第二回念佛)

一、午前九時より十時迄 (第三回念佛) 助音者花子 一、午後一時半より二時半迄 (第四

回念佛) 助音者同行五名 一、午後四時より五時迄 (第五回念佛) 助音者同前

一、午後八時より九時迄 (第六回念佛) 助音者靜道

念々相續大事大事、油斷大敵只々無間念佛

以 上

の書を掲げ、其上部には従本上人よりの來翰を掲げ、仰臥して前面を拜すれば三尊迎接の尊容、右すれば三身一如の聖影、左すれば師父の面影、眼に映するすべてが念々相續心の策勵にと用意周到至らざるなく、聊かも病苦を感ずる模様だに無く温顔愛語の説法と不斷相續の念佛中、時々迫り來る臨終、刻々に近づく終焉も更に意に介することもなく、平然として昭和六年の新春も病床念佛説法中に迎へられ、一月八日道友弘道の訪問に對していつにかはり無く御法の話、遺稿出版の事を頼み、弘道のもたせらる、京都光明會青年部主催の別時修養會參會員百十餘名より献げたる名號自署の見舞狀を、心悅ばしく押し頂き、九日、佐々木爲興上人の來訪には病驅を忘れての法談光明會の將來などこま／＼と物語られ、越へて十二日危期迫れりと騒ぐ寺内の人々を誡め、温容慈顔、從容として大ミオヤの御許に歸る時を待たるゝ風情近侍の人々其尊さに感激するのみ。

寒天水りつく一月十四日、辨榮聖者の十周年におくるゝ四十日、午前十一時廿五分高聲念佛數十遍、仰臥合掌のまゝ慈顔五體、微動だに無く、四隣寂として靜かな助音

の念佛の聲に包まれつゝ、人息全く絶ふ、立ち上る香烟と共に、涅槃の淨域に證入し玉ひ畢んぬ。南無阿彌陀佛

嗚呼!! 大谷上人!! 化度實に四十年殊に辨榮聖者に常隨傳法の後は、法幢いや高く

翻し、法鼓到る所に響かせ、上人の化益を蒙りし信徒萬を以て數ふ可く、其法徳誰れか讃仰せざらむ、嗚呼!! あの温容靈語永久に再び接するの日無きを思へば、凡情として忍びざる思ひぞすなれ。

辨榮聖者の遺法たる光明主義の信火、今や遼原の火の如く全國に燃え擴がり、上人の如き正統傳持の大師の少き今日、上人遷化の悲しき日を迎へたる事は實に痛惜の情切なるものあり。然れどもそは凡情の悲哀にて、上人としては既に死生を超越して、病中病無く、生中無生に入り玉ひ、入涅槃の勝相を吾等に教示して非滅に滅を顯はし玉ひたるを感ずるとき、人生としての最後迄佛子の使命を果されたる上人の本懐、嘸や大ミオヤの御許にありてほゝ笑み玉ふらむ。

かくあれと範を遺して木枯の

吹く音とともに逝きし友かな (昭和六年一月)

大谷上人を追憶して (御一週忌に)

道友 中 川 弘 道

上人と自分とは青書生時代からの友であつた。然し其頃迄は單に學友としての交りで、クラスも違つて居たので、眞實の上人を知る程の親しい仲では無かつた、たゞ幾分變つた温厚な才士である位の見方を持つて居た。

ほんとうに上人を知るようになったのは、互に手を携へて教界に乗り出すことになつての後で、當初から將來教界の英雄將たるべき素質の持主である事を畏敬して居つた、が、確かに上人の、あの圓滿な、温みのある、尊い靈的人格を成就されるに至つ

たのは、聖辨榮上人に常隨して、光明主義の深奥に達し、念佛三昧を修して如來の靈育を豊かに蒙られた結果である事は云ふ迄も無い。

嘗て上人と自分の二人が教區の布教團を理事するようになった時、自分は上人に對し、布教團を今少し活かしたいと思ふが、其方策を云何にすべきかと相談せしに、上人は忽ちにして、實に一宗を振興すべき大規模の計劃を立てられた時、自分は上人の時代を視る眼の鋭く、卓越せる頭腦の精密さに驚異せざるを得なかつた。其超凡的大計劃も豫算の關係上、完全に實現さすことの出来なかつた事は實に遺憾であつた、がとも角一種變つた、創造的策謀に富んだ、而も底の知れない精密な頭を持つて居られた事は争はれない。

上人は恩師辨榮聖者の寂を北越に示し玉ふ以前より、あらゆる機會に、上人獨特の傳道術によつて、各地の教化に身を挺し、使命精進の範を示されてあつた、が恩師の滅後は最も熾烈に光明主義の傳道普及に其全生命を投ぜられた。主義傳道の爲めには寺庭を顧る暇なき有様で、又彼の清廉潔直の質は、餘り豊かに物質的に恵まれない方であつたが、上人はそんな事は聊かも意に介するもようもなく、殆んど上人の腦裡の全部が傳道布法に充されてあつた。自分の寺門を訪はれた事も幾十回、其度毎に片言半句の私事に亘ること無く、たゞ／＼主義の普及法、恩師の法徳をいかにして世に傳へんかの赤誠に充たされたる尊い物語りのみであつた。實に上人は如來の權化、化導の菩薩であつた事が今更のように尊く仰がる。

九州の地狭少ならず、都鄙至るところに、光明會員の幾千を數へ、木魚の響き轟々として、眞劍に念佛する人の數多きに至れるは、偏に上人の教導徳化の遺徳と云ふも決して過言では無い。

特に上人の非凡の敎家、靈的人格の典型であつた事は、其教化を蒙れる人々の等しく認むるところで、別に多く語るを要しないが、就中自分が長き親交をつゞくる間に特に尊く感じたのは、何か事を成し遂げても決して其効を己れに歸せず、他を推して

効者たらしむる如き、如何なる場合にも如何なる人に對しても、溫容慈顔、恰も悲母の愛兒に對する如き態度もて、愛言和語、諄々として盡きざる慈訓を垂れらるゝ其尊さ、いかなる批難攻撃に對しても、決して敵對反抗の態度に出でず、之れを寛容し、遂には相手を懐けしむるに至る、而も主義主張に至つては一步も譲ることなく、凜然として不可侵の威力を内藏されてあつた事、數へ來れば、自分の腦裡に浮ぶ對上人のすべての追憶が、油然として湧き出る、到底其大海の一滴だに筆に顯はず事が出来な

い。不幸にして不治の病に罹られし後は、恩師の『急がねば日が暮れる』の遺訓を寸時も忘れず、最後迄法談化導の敎家の使命に精進され、實に全生命を如來に投入し、眼中死なく病なく、從容として最後の範を世人に遺し、自若として涅槃の淨域に歸入し玉ひし其尊嚴さは、世の人の周知の事實である。

嗟々!! 無二の道友たる 上人を亡くして滿一年、再びあの溫容に接せられず、敎界の前途を思ふと共に、轉た寂莫の情に堪へない、追憶の情綿々として胸に迫り、手先き鈍つて筆進まず、遂に上人御在世の法徳を追憶して、爰に一周年の聖忌を迎へて、寶號念誦、心阿尊尊仙界上人の莊嚴淨土を祈り、早く、還來穢國して、迷へる吾等を引導し玉はんことを。

範を遺して逝き玉ひし上人を追憶して

かくあれと範を遺して木枯の

吹く音とともに逝きし友かな

吾れもまたかくやあらなん法の友

書きのこされし玉章を見て

上人の一周年聖忌を迎へて

友逝きて早や一年は過ぎにしも

いやしのばるゝ在りし昔を

大谷上人と私 (御一週忌御別時に贈て)

三八

佐々木爲興(談)

自分が、大谷上人を知つたのは、極めて日の浅い事であるが、其短かい月日に尊き縁の浅からざることを深く感ぜざるを得ない。

大正五年の六月、之れが大谷上人に面接の最初であつた、祖山の高等講習會に出席すべく乗車、車中大谷上人も、同じ目的のもとに其列車に乘車されてあり乍ら、知らぬ間に京都驛に共に下車、市内電車に同車して、始めて双方より名乗り合つたのが、それが自分の今日ある最初の糸口であつた事を思へば、ほんとうに奇しき思ひがする、旬餘日祖山滞在中、何となく慕はれるような大谷上人と起居を共にして過した。

其年の十二月、中學時代に熊本を知るの外、九州の何れも未知の境であつた、其九州の而も夏已來親交の畏兄大谷上人の任職さるゝ、長安寺に五日間の布教を擔任することになつた、素とり青年時代の自分として教界への歩みは初歩であつて殊に九州の地では之れが第一聲であつた。

長安寺布教の第一日の午前、同寺に着、直に本尊前に跪けば、大谷上人も昨夜、五島方面の傳道を終つて歸つたばかりで、準備も整はぬとして、本堂内の取方付、生花の供養中であつた。自分は本尊前に跪座し乍ら上人の如來前に奉仕さるゝ其態度の恭敬謹肅至らざる無き敬虔の態度に、云ひ知れぬ尊さを感じさせられた、座敷に到れば、内室の自分に對せらるゝ態度、書生氣の自分として、一として感激の種とならざるもなく、布教に來た自分が、反て教へられるような、導かれるような有様で五日間を過した。

其間、自分として忘るゝ事の出來ないのは、確かに之の五日間に、自分を更生させて戴いた鴻恩である。一晝夜法要の勤行は、光明禮拜儀によられてあつた。自分は、南無一の一唱三禮も至心歸命の文相も耳にするのが始めてで、奇異の感を抱くまゝ、

三九

四〇

第一日の夕刻であつた、之のお寺は動行式も普通と異つてあるが、何か異つた方法で御修養なさつてありますか、とお尋ねした。其時、上人は待つて居たと云はぬ計りに淳々として光明主義の概要を、之の箱火鉢の中に挟み、二人對座のまゝ、法談盡きぬ有様であつた。法要中多忙ながらも、寸暇を利用しては自分の爲めに、辨榮聖者の御人と成り、其教義の一般を懇ろに教説して下さつた。よく熟讀せよと與へられたのが、「自覺の曙光」「大靈の光」「宗祖の皮髓」の三部であつた。よく讀んだ幾回ともなく繰り返し讀んだ、一方時々の法談は盡きなかつた、全く自分は之の五日間が生涯を通じて有意義な更生期であつた。自分は卒直に云へば、「聞法入信」で上人より法を聞かされて信眼を開發させて戴いたのであつた、上人の法談を聽いて居る間に、幾度も無我の境地に入り、肉眼は開き乍ら、眼中何物も障るもの無く、襖なく、室なく、廣大無邊の天地開け、其直前に尊き聖影の髣髴たるを拜しては、法談を中止して貰つて、思はず合掌念佛することが幾度もあつた。

更生期を迎ふることの出來た自分は、之の有意義な五日間を終つて、長安寺に告別した。お寺とは別れを告げたが、上人と袖を分つことが痛く惜まれて、能ふ可くんば今數日を上人のみ許に費して教導を請はなんと望は切なるものがあつた、次寺の約束に攻め立てられ、止むなく、涙を吞んで再會を期し上人のみ許を辭した。次の布教地は周防の阿月願成寺、遷る道中車上、從來用ひ來りし教材は一つとして用ひられず、途中全く之を破棄してしまつた。古き教材を捨て新らしい教材は未だ得られざる過渡期に立つた布教師様、イヤハヤ、滑稽と云ふか、悲哀と云ふか、次の願成寺の教臺に登つて何一つ言ふ可き言葉を知らず、語るべき材料を所有せず、如來様今現にここに在すの一語のみくり返し其寺の教筵を終つたことも、確かに今に腦裡に遺つて居る。

嗚呼自分は辨榮上人とは、古い頭の頑固な舊式の學者で、かはつた奇僧だと云ふやうな感じで引き受けて居た。之れ等の蒙は大谷上人の導きによつて全く啓かれた、辨

四一

榮聖者に自分を紹介して下さったのも大谷上人であつた、大谷上人は實に自分を更生させて下さった大恩の慈母であつた。

越えて大正八年七月、大谷上人と共に、辨榮上人のお伴をして、九州各地を巡行することになった。今に忘れぬ、炎熱炳くが如き日、涼風に胸襟を開くの夕聖人法話のひま／＼に大谷上人は懇ろに自分に復説し、又は疑問を解いて益々法の淵深くお手引き下さつた。直方市隨泉寺、香月千福寺、粕屋西林寺、福岡西方寺、筑後歡喜院、鹽田本願寺、佐賀稱念寺、佐世保九品寺、諫早慶嚴寺、柳川光樹寺、以上十ヶ寺が其七月一ヶ月、聖人御傳道の舊跡で、亦自分と大谷上人の二人がお伴さして戴いた最初の記念すべき寺院である、引續き、八月一日より自分の住寺たる廣島心行寺で辨榮聖人を迎へ光明主義の第一聲を廣島の天地に響かせることになった。熊野上人の聖人に接せられし時も實に之の時であつた、大谷上人は勿論。九州の兄中川上人も祖山の輪番布教の歸途立寄られ爰に不言の裡に將來の光明運動大飛躍の素地全く成るの感じがした、云云

大谷上人の御靈前に

祭道

六八の年を重ねし君が身は

五劫思惟の姿なるかも

急がねば日がくるゝとて説き示す

法の姿やいとも尊し

大谷上人の思ひ出

山崎辨誠

生死事大無常迅速、師父聖者御遷化後顔々として明星の隱るゝこと何んぞそれ速かなる、時に臨んで決せざれば死して後悔ゆることあるべし、奚んぞ閑葛藤に消費するの日月あらんや、至勝々々
昭和六年一月十六日、東京田中先生より大谷上人御遷化の報に接す、直に御法名を御佛前に安置して念佛にひたる。

昭和四年十月十八日晚秋の好天氣に庭前の落葉をかき集めて室内に入れる時大谷上人御來寺（五香善光寺）せらる、私は夢の如く凝視して「やうこそ！御病氣は如何ですか」と伺つた。「ハア、胃は三分の一程残り除つたが其後おかげで経過も良い方で——今日は突然に罷り出しました」と言はれた。

私が道兄を知つたのは大分古るい 初めて遇ふたのは明治四十五年の春？であつたかかと思ふ。場所は東京淺草の誓願寺であつた。それは同寺住職が聖者の御法兄に當り加へてその御晋山當時殆んど廢寺のやうに荒れ果こゝ居つた其寺再建の爲めに聖者も多大の御盡力を致された御因縁などで御歸京の際は多くこゝに御留錫せられて居つた。我々下總の修行者もその都度御歸京のおたよりによつて出京するのを上もなき樂みにして居つたのである。ソナ譯で一日誓願寺へ行くと少し瘦せ形ではあるが何處となく引きしまつた青年僧が隨侍して居られた。そして聖者よりいつもの如く紹介せられたが、何んだか些と異はつて居るやうに感じた。同宗の僧侶のやうにも見へるし又他宗の僧のやうにも見へる。勿論聖者は從來いろ／＼の侍者を連れて來られたからそれに不思議はないが——眞言宗の僧もあれば禪僧もある、居士もあれば在家もあつた。特に道兄がその時分厚の眞宗聖典に讀み耽つて居られたことなども私の注意を深めた一原因であつたかも知れぬ。私其當時は未だ融通のきかぬ所謂「我が宗の安心は」の一本槍であつたから。丁度其頃法兄戸井崎君が同寺より通學して居られたから歸寺の節「先達日隨行して來たのは誰れか、大分異はつて居るではナイカ」と言つたら「ウン、アレは九州の大谷仙界師と云つて矢張り淨土宗の僧侶ダヨ」と云はれた「然し異つて居るヨ、晝は袈裟ころも出勤もするが夜は羽織袴で教會へ行つてアーマンだよ」と笑つた。私も「ハ、ハ、ナルホド」と思つた。仙界と云ふ名も少々おかしくはないかと思つた。

そんな譯で大谷上人は何んもなく記憶に残つて居つた、聖者も亦時々大谷が／＼と云はれるので道兄の御動靜には常に心を向けて居つた。

聖者御歸院の時コンナことを云はれたことがある、「汝、了せんと欲せば直ちに了せよ。他日を期すること勿れ、某氏は大谷の紹介で愚衲についた、云はゞ大谷の後輩であるが精進功成つて既に發得せりと。大谷大にこのことに懺愧して憾らみとなし我れ亦發得せざれば出で、再び一字も説かじと瘠せかけて居たので辨榮が「モウすでに救くはれて居るではナイカ」と云つたら訝顔さうに「ハ、さうですか」と云つて居つた云々」と。この話しが妙に私の脳裡にひびいたのである。然し「ハ、さうですか」で大谷さんはどうなつたのですかと今少し立ち入つて聞きたかつたのであるが「ソレハ本人に聞いて見た方が良からう」と言はれるとツマラヌから止してしまつたが、一度はこの話しを道兄から直下に聞きたいものと思つて居たのである。

其後御面接したのは聖者御遷化當時柏崎極樂寺で旬日ほど起居を共にしたがアノ際とてソナ方面（或は大谷なことかも知れぬが）に付て膝を交へるやうな暇なく、又翌年祖山で追恩別時の際も逢ふたがこゝでも左したる話しも出来なかつたのを甚だ残り惜しいことに思つて居た。且つ聖者御遷化後その御芳躰を尋ねんとする輩加ふるに付て我が責任の重き、その烏嵩馬に墮し去らんことを怕れて一度は九州の御自坊へ拜趨して親しく御聲咳にも接したいものと常々思つては居たが諸務に追はれて意を得なかつたのである、それが計らずも飄然として御來寺せられたのである。

十月十八日午後より同二十四日まで御滞在を願つた。此の間本堂でよく御念佛せられた、私も時々隨喜さしていたゞいた。然し何となく此度の御來寺が普通修行者の只一途なる見佛所期ではないやうに豫感したので、時々は好天に任せて共に御立場（寺より南方一二町の處、徳川將軍鹿狩の跡にて林間に丘状をなし風光美、聖者も御歸院の際はよく御遊歩し給へり）に杖を曳いて亂れ咲く千草の中にいろ／＼と談り合つた。夜は土地の青年なども來り拜して御坐談に時の更くるを忘れしことも再三であつた、本日其中の二三を抄記して追憶を新たにす。

殊に御食後、夜間などにはいろ／＼と拜聽さして頂いたが、又却つて種々の御質問

にも逢着した、資料は大抵「片影」中の御逸事に付いてゞあつた。尤も私がソノ出版するに際し豫め道兄の御諒諾を得居り、資料も借用して居る點などからその責任の一半も亦道兄の土にかゝると云ふやうな思召からであつたかも知れぬ。最初の御質問は「中心は在るか」に付いてゞあつた、其話頭に大さう興味を持つて居られたやうであつた。實は私にも亦それが中髓をなすので、百里に知己を感じた。往時思へらく、下種結縁の如きは他山の僧にゆづる、我れには一の天地あり曰く「對揚深く愛す老俱胝宇宙空うし來る、更に誰れか有る」提唱し畢つて三百禮、是なる哉／＼と、無知見中に知見を立て聖者にまで累を及ぼせしこと罪科彌天である。「その時の話しを最少し爲てもらいたい」と道兄が云はれるので之れを再説した、ソシテ「形式上では私が勝つた譯でスナ——カモ知れませんヨ」と笑つた。

スルト道兄は「ハア、大さう有り難いことでしたナア、ナルホド、自分にもそれによく似た話しがある」と、云はれた「どんな御話ですか」と質問すると、「いつか自分が念佛して居ると、上人が「大谷ドンナ心持ちで念佛して居るか」と云はれたのでこの大宇宙は皆これ如來盡十方無碍光の懷であるからこのまゝでたゞ南無阿彌陀佛々々とやつて居ば良いのです、ハイ」と云つた。スルト上人は「ハア、それも至極結構なことであるが、然し射を習ふに初めは必らず的を置いて習はしむる如く、念佛も矢張り向ふに的を置いてやつた方が良い、金的は小さく翳窟のやうであるがそれにあたるやうになればアトハ任運にあたる如く、金的に比すべき本尊は小さいやうではあるがそれに的中するやうになれば、所念の的は小さくとも實はその本尊が無碍光なるが故に、能念の心も亦無碍光と化るのである。デあるから矢張り本尊を向ふに置いて申した方が良い」と云はれた。丁度それとよく似て居る「簡明で良い」と、言はれた。

一夜青年も拜問に來合せて談たま／＼見佛のことに及んだ時「貴師は聖者にも永年奉仕せられ又光明會の先達として必ずや尊き幾多の御消息があまりでしやう」と、云つた。スルト「いや、別に何も異つたことはない」と云はれた「お在りさうなもので

スナ、デハ御夢の中にでもなかつたのデスカ」と、重ねて問ふた、スルト道兄は暫らく黙つて居られたが、やがて笑はせながら「ハ、上人に隨行中只一度だけあつた、尤もソレハ夢かうつゝかわからないが然し今でも釋然として居る」と云はれるので、「ドソナことでしたか」と再問すれば答が仲々振つて居る。

「最初自分は上人に拜謁した時一見直ちにその非凡なるを感じた、そしてその御高説にも引き込まれた、が然し亦一面では何だか些と異安心のやうにも思はれるフシがあるので、寧ろこれを捨て去らうかともしたことがあつた、が亦不思議にもその偉大なる人格の力にひし／＼と引きつけられて仕舞ふのである。けれどもまた、汝異端者ヨと心の一隅でさゝやく。そこで一日思へらく今日は上人と膝詰談判して若し我宗の安心を亂す如きあらば宗祖末孫の光榮としに一射して葬り去つて祖恩に報せんものといろ／＼と質問を續出したのである、スルト上人は宗祖の道詠に基いて細に涉り微に宜りて懇説せらるゝに條理整然として一糸の乗するなく只謂々諾々として首の垂るゝを覺ゆる計りであつた。實に成佛は易く善知識に逢ふは難しと、我れ何等の多幸宿善ぞ、こゝに身命をさゝげて奉仕せんとしたのである。爾來諸方へも隨行した、尊き御日常にも親灸させていたゞいた。然し世間では依然として種々の憶説が沸騰して居つた。曰く彼は一念義である、曰く彼は眞宗の安心だ、曰くキリスト教の眞似だ等々とそこで自分は思ふた、自分はこれで良い、然し上人の勸化力も遂に彼等をして一言の下に説服せしむべき善巧に由なきものか、曾て聞く、往昔嵯峨帝の御宇、弘法大師歸朝して佛祖の恩を報し國家の福をまさんが爲めに秘藏の教門を開きて性海の眞源をあらはさんとし給ひしに、道、餘宗よりも高く法つねの習ひにことなるにや諸宗の龍象鋭鋒をあらそひて伏膺をなさゞりしかば遂に清涼殿の闕下に自ら三密の法によつて即身に成佛の秘奥を显现せんと欲し南方に向ひて契印を結び眞言を誦して秘觀を凝らし給ひしかば肉身忽ちに遮那の眞容とあらはれ鳳闕立どころに玻璃の妙界に輝きしかば一人首をたれ群臣掌をあはせ諸徳地になり拜謝の百寮身をなげて禮敬せり」と、上人

も左の如く餘りクド／＼して説いて居るよりは大師の如く、今現にこの通り々々とやつた方が早やわかりで良いではないか」と、甚だ不遜なことではあるがソソナことを思つたことがあつた。

其後たま／＼某家へ隨行して御法話も深更に及んで寝んだことがあつた。上人は奥座敷に臥され自分は次ぎの間に襖をへだて、床についた。フト眼を開いて見ると早や上人は平常の如く端坐して居られる、これは失敗つたと思つたが上人は何とも言はれない、そしてこちらは見て居られるが何んだが様子がおかしいのでジツト凝視して居ると、不思議ではないか上人の姿は段々と變はつて行く驚くべしそこには光明赫灼として遮那の眞容が一體青蓮の御毗を垂れさせて、こちらをみそなはせて御座るではないか、思はず「呀！上人やり居つた！やりおつた！」と讚歎して居るとやがて何時ともなく尊容も上人もなくなつて仕舞ふたのである。どうも不思議だ、今のは夢か幻か、否、確かに兩眼は開らいて居つた筈だがと、モ一度見たいものとあせつて見たが遂に再現することは出来なかつた。ハテ上人はとヒソかに隣室を窺へば、御夢まどかにスヤ／＼と安眠して居られる——實に不思議なこととは思へる頃東天紅を告げて夜のとばりは明けそめたのであつた。自分は不思議でならない、因つて翌朝食後上人に擧げて御容子如何と注視すると、上人は只だ「ハ、左様で」と微笑して居られるのみであつた。ソソナことが只た一度あつたのだ」と、云はれた。そこで私が「ハ、左様で」は面白かつたですナ、私も聖者にヨク此の語あるを知つて居る、そしてソハ語簡明に而も滋味津々として盡きないものだ、恰も禪の一喝にも似てまさに千均の重みがあると云つた。スルト道兄は「ところでアナタは禪をやつて居らるゝやうだ、實は上人も曾て自分に禪を少しやつて見テハ」と云はれたがどんな書物が良いでしやうかと云はれたから「否ナ、やつても爲ても居らぬ然し禪書なら少しは見たことがある」と云ふト、「見てどんなですか」と云はれるから「御かげで大分理窟屋になつたやうだか幸ひ此頃では斷腸思慕の念佛で忘れて仕舞ふたのです」と云つた、「デモ聖者がさう

云はれたら碧巖が無門關でも見られたらどうですか、然し理解は禁物ですよ」と云つた。「デハ見たいものだ」と云つて居られた。

此他或は御隨行中に於けるいろ／＼なる御芳躅を拜聴した。そして再版の節にはこの片影漏れを加へて呉れるやうにとの御依頼であつた、私も何等かの機會によつて發表したいと思つてゐる今日その一二を發表させていたゞくことも亦その一つであるかも知れない。

道兄は又聖者に關し、十二光の内容に關し、光明會の現状及び將來に對して御腹藏なき御意見を漏らされた。或は例の「ハア、さうですか」の御内證や大御手術直下の御感想、又は一時御現住の自坊を出られて小倉市の矮居で孤軍奮闘せられた御苦心物語りなどいろ／＼と拜聴したが他日に譲り、いよ／＼二十四日午前十時頃より自動車で松戸教會へ御供して信者方のために一席の御法話を願ひ、そして直ちに鷺の谷へ案内する寸暇を割いて記念撮影した、思へばこれが最後の紀念となつたのである。

午後三時頃我孫子驛で下車した、幸ひ雲なく風なき好天氣であつた。二人は急そがぬ路をユル／＼と歩いた。沼上には小舟が二三隻浮んで居た、途中子の神社に詣りて暫時秋景色の中に冥想した。夕陽赤き渡船を超へて御生家へ着いたのは五時すぐる頃であつた。丁度明日は御主人彦太郎氏の初月忌に當るので準備のため人々も來合せて居られた。佛前に御念佛後聖者の御令姉に案内せられて御菩提醫王寺に詣していろ／＼聖者御遺跡を巡拜した。夜分は土地の會員も集まられたので共に禮拜儀をあげておつとめをした。そのあとで御法話を願つた。聖者の御肉弟（須藤覺之助氏）も來て居られた、そして夜の更くるまで聖者御幼時の芳躅を拜聴した。

翌日は道兄御導師の許に會員の人々も加はりて初日忌を勤修した。あとで老人連が割笏をいれて阿彌陀經の訓讀をはじめ出したのに感心して居られた。コレも聖者御遺徳の一つである。それから又も御家人に願ふて御幼時の御寫本、佛畫等を拜見した。

當日は朝よりボツリ／＼と雨模様であつたが御豫定があるので盡きせぬ名残りを惜

んで別れを告げ、途中まで須藤氏に送られて我孫子驛に着いたのは九時五十分頃であつた、十一時近くの下り列車で水戸在の御法兄？を訪られるのである。雨は頻りに降り出した。その中で時間をまつまで話しは次から次へとつゞいた。スルト最後にこんなことを云はれた、「自分も今年一バイは色々の都合で寺を出られぬが來年になれば自由の身となれるからその時はまた／＼と御厄介になりに来る——然しその時は茶の衣で來るか杖ついて來るか、ドンナ姿でくるか、と微笑せられた。（聖者御遷化後、ヨク茶の衣に草鞋がけて時々杖し給ひて御歸寺せらるゝを夢見る人々ありと過日御話ししておいたのである）。

列車は來た、道兄は元氣よく乗車せられた。私は室内まで送つた。汽車は汽笛と共に黒煙をはきつゝ千條の雨を衝いてゆるぎ出した。道兄は半身を車外に出して合掌して居られた。私は御法體の上に一しほと如來の御加護を祈念しつゝ遠く消へ行くまで合掌目禮して居つた。ソシテこれが何んだか今生の別れのやうな氣がしてならなかつた——。

（昭和六、二、一日稿）

噫大谷上人と感激の三涙

立川 圓 月

噫大谷上人、光明主義を生命として、光明生活を體驗し、生涯の後半生を光明主義の運動に獻げ、光明會の權威者として、光明教團の師表と仰がれたる、仙界大谷上人は、其の人格、其の識見、ともに、私の敬意を表せる一人であつたが、惜ひ哉化緣業に盡き、昭和六年一月十四日、願王の本願、六八の願數に擬らへでか、壽齡正に四十八にして、法王の本家に還らせ給ひけるこそ、實にも悲みの極みである。前に上人の恩徳を讃仰し、其の事蹟を記念すべく、涙とともに筆を執れば、諸種の感想交々に湧き、禁せんとして禁じ得ない思出の中に、撮要せる一篇こそ、感激の三涙なのである。

一、求道の感激。上人は生命の信仰を得んがために、立派なる一寺の住職であり、相當の教師でありながら檀務の纏綿と、名利の利害とを斷棄し、光明主義の高調者聖辨榮上人に師事し、長ひ間の教導によりて終に、光明主義の信仰を得られたりと云ふことである、私は私それ自身の求道過程を省みる時、私にも長ひ間求道の悩みがあつたが、私にはさうした斷行がなか／＼容易に可能なかつたことに鑑み、上人のかうした「眞劍の求道」に對し、思はず感激の涙が落つるのである。

二、眞生の感激。上人は斯くて此の光明主義に生かされてから、一時居を小倉市田町の心光寺に移されたことがある、それは一には自分の信仰生活を純眞にしたいと、二には光明主義の傳道に便誼を得たいのとの、二大念願に燃へられた、結果であつたと云ふことである、私は、私それ自身の信仰生活を通じて上人のさうした、「眞生の信仰」を味ふ時、瀕りと感激の涙がこぼれるのである。

三、風格の感激、達識の人の前には其人の全體が成算される、鑑識の人の前には其人の一切が検討される、それは神聖なる直感の世界でもあるが、同時に嚴正なる批判の内容でもあるからである、一九三一年の化粧法は、化粧法より肌色法に轉向したさうである、これは化粧の欺瞞より、個性の發揮へと進換したのであつた、たしかに其の眞價への目醒であらう、大谷兄が、崇高にして底力ある風格の持主であつた、作り飾りのない、はつきりした、いやみのない風格の持主であつた、私はかうした、上人の風格に一種の共鳴を持つて居つた、光明主義のお上人達の中で、私の一番好きなのは大谷上人であつた、それはあうした風格こそは、個性の純正、利害の超脱、眞生の信仰それ等の内容より顯現されたる、反映の風格であるからである、私は、私それ自身の風格の顯現に徴してあうした、上人の風格を観る時、坐ろに感激の涙が流れるのである。

感激の三涙、稀世の傑僧、聖日蓮上人は、「鳥蟲は鳴けども、涙は出でず、日蓮は泣かねども、涙間なし」と云はれて居るが、私は敢て彼の大きな日蓮に擬らへようと云

ふのではない、私は素より小なる私それ自身なることを識つてをる、しかし、私が今親り上人の前に流す、「感激の三涙」そのものこそは、聖日蓮が間無く流す、遺る瀨なき、涙そのものとして、逝きにし給ひにける大谷上人へのせめてもの手向とすべく、念願するのである、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、(昭和六年二月)

故諦道上人と仙界上人を追慕し奉る

井 上 隆 森

我佛教界に於ける近代の偉僧、我淨土宗に於ける快僧と敬慕する、故波多野諦道上人が在世の砌、師父辨榮聖者の非凡なるを識り、仙界上人に伴僧たらむことを勸導せられたのである、

所が仙界上人は、辨榮聖者の非凡なるを知悉せざるため、諦道上人へ辭退再三なりし、然るに諦道上人がアマリ切なる勸導を無下に退けるにも及ばぬ破目となりし爲め、二三日の心組で同伴せられた、それが辨榮聖者と仙界上人と因縁を結ぶ初めでありしよと、仙界上人の御直話であつた、愚衲は故諦道上人に面接せしは、去明治四十二年の春、祖山の春期巡教の砌に御伺ひした時で、彼有名になつた、七百年御遠忌(十四年)の九州團隊參拜、筑前團參の大旗を振り上げんものと種々畫策中でありしやに記憶する、諦道上人が、辨榮聖者を九州の地に深く／＼印象づける緒を開かれたので、若しも此上人無かりせば、聖者は他に御轉錫なされかも知れないのである、然らば九州光明會として先づ／＼諦道上人の御鑑識の崇仰さを忍んで頂きたい。

仙界上人は、再三諦道上人の勸導により遂に聖者の御指導を受けられ、爾來日に／＼如來の御靈育を受け奉りて、殆んど全國的に我光明主義宣揚に努められた。

自他兼濟益々堂奥に到らんとするの時、惜哉／＼四大不調——善導大師の御忌日たる十四日——六八超世本願に因める法壽を一期として、非滅に滅を示された、實に／＼我宗教界の雄將を失ひ痛嘆の極みである。

尊聖仙界上人よ、私達の牛の歩みよりも尙ノロキ足ドリを憫笑するを止めよ、日に
 〱擡頭し來る我光明會の若人あり、靈血に腕鳴らす青年男女幾多あり、私達の老骨
 はヤガラ、仙界上人に直面するの時近きにありとは云へ、青年會員が今後益々彼の熱
 誠と強き意氣を以て猛進されつゝあれば、金蓮臺上、之を鞭撻し提撕し給はんことを
 切に念願し奉る。(昭和六年一月)

大谷上人

堺 静 道

静かに觀すれば今日全國光明運動の第一線に立ち給ふ諸上人及び各地の光明運動の
 中心となり給へる諸師、殆んど上人の手引と云つても過言ではないと信じます。のみ
 ならず未だ光明主義に對して兎角の非難を放たれる諸師も大谷上人の人格には皆敬服
 してゐられましたか

一月廿六日この日上人の御表葬は曇まじりの小雨シトシト降りそゞぐ小山田のこ
 〱長安寺に檀家葬を以て營まれる御本堂から庫裡にかけては無慮五六百の人を以て埋
 められました、蓋し山村始まつて以來の盛葬だつたらうと思ひます。而も會葬された
 大多數は光明會員であつたのは如何に上人の御徳の高かゝりしかが何はれます。さな
 がら實質は全國光明會葬でありました。更に百餘の御寺院中過半數は九州及び全國各
 地の光明會の統率者であり、中心者でありました。就中平生光明主義を快よしとせな
 い諸師も多數虔敬な態度で參列されてゐられたことは今更ながら、故上人の人格の餘
 徳を忍び奉つて追慕の念切なるものがありました。

全國に不惜身命以て最後涅槃の御夕べに至るまで日本民族の心靈更生に殉教された
 御一生は燦然と我等の心眼の前に輝いてゐます。

辨榮聖者の御あと追はれて大谷仙界上人も早聖きみくにに入り給ふた。痛惜の極な
 りと雖も兩上人の芳躅を慕ふ光明會員は徒らに悲しむをやめて更に倍奮の努力を以て
 顯現極樂の光榮を祈りませう。合掌。(昭和六年一月)

昭和七年 一月十一日	印刷	陸代郵税非
昭和七年 一月十四日	發行	年 二 圓
編輯兼 發行人	山 崎 辨 成	
印刷人	小石川區關口町六十五番地	
印刷所	小 林 七 太 郎	
印刷所	小石川區關口町六十五番地	
印刷所	靜 文 社 印刷所	
	電話牛込五四一九番	
	東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地	
	ミオヤのひかり社	
	振替口座東京六八五一番	